

独立行政法人 国立国語研究所 第9回「ことばフォーラム」

話しことばの豊かさ, 再発見

2002年3月24日(日) 午後1時30分～4時30分

なの花ホール 山形県東田川郡三川町

- ◎方言, 共通語, 敬語がともに生きているふるさとの話しことばの多彩な広がり, 参加者の皆さんといっしょに探検し, 人と楽しく話をするためのことばのはたらきを再発見します。
- ◎豊かな言語生活を営み, いろいろな人と円滑に会話をする力を得るきっかけをつくります。
- ◎話しことばについて理解を深め, コミュニケーション能力を育てる言語教育を, 参加者の皆さんといっしょに考えます。

司会進行 吉岡 泰夫

塚田実知代

第1部(1時30分～3時00分)

主催者あいさつ

国立国語研究所長 甲斐 睦朗

後援者代表あいさつ

三川町長 佐藤 京一

1:40～2:00 庄内と国語研究所

吉岡泰夫(国立国語研究所)

2:00～2:30 方言と共通語 —櫛引町の談話資料から—

井上 文子(国立国語研究所)

コメント: 佐藤治助(庄内ことば研究家), 堀 司朗(鶴岡市史編集委員)

2:30～3:00 若者の敬語 —三川中学校の調査から—

尾崎 喜光(国立国語研究所)

《 休憩 15分 》

第2部(3時15分～4時30分)(2会場で同時進行します。)

① 方言による授業作りの可能性 —小学校の授業観察ビデオから—

茂呂 雄二(筑波大学)

報告: 佐藤武夫(三川町議会議員), 斎藤元弥(三川町立横山小学校教諭)

コメント: 甲斐睦朗(国立国語研究所長), 佐藤栄市(三川町議会議員)

② ことばビデオ『ことば探検・ことば発見』—総合的な学習のために—

吉岡 泰夫(国立国語研究所)

※ほかに『ことばシリーズ』『日本のふるさとことば集成』など, 刊行物の展示があります。

庄内と国語研究所

吉岡 泰夫

(国立国語研究所)

戦後のことばの状況と国語研究所の調査研究

国語研究所が創設された昭和23年頃の日本は、各地域によって暮らしの中の話しことばに特色があり、各地方言にはかなり違いがありました。また一方、近代化によって、交通・通信網が発達し、各地域の人々が広く交流する生活の場面があり、共通に意思を伝え合うことばとして共通語が生まれていました。

方言と共通語がともに栄える地域社会を目指して

本来、方言と共通語は対等の価値を認めるべきものですが、実際は、特色ある方言を持つ地域の人々が、自分の方言を不当におとしめられることによってコンプレックスを持ち、よその人と、自分の思うように話すことができないという言語問題が起こっていました。

そういう認識に立って、国語研究所は、地域社会における言語問題の探索的な調査研究から出発しました。まず、地域社会に暮らす人々の言語生活の実態を明らかにすること、そして、方言と共通語がともに栄える社会を築くために、解決しなければならない言語問題を明らかにすることです。

鶴岡市のみなさんにお世話になった調査

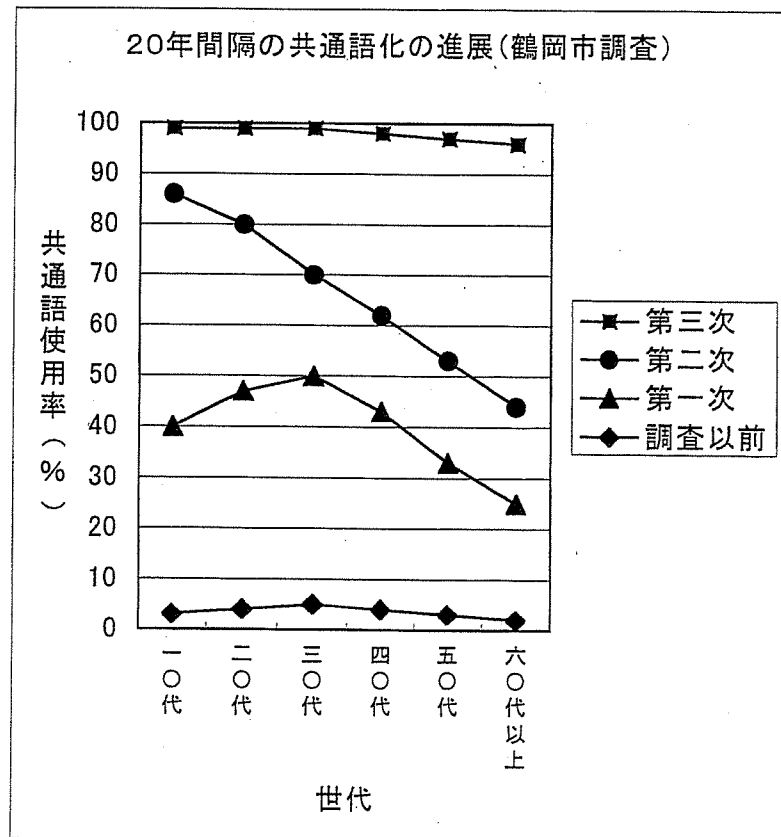
第一次の調査は昭和25(1950)年に実施しました。(1)共通語化の要因と過程、(2)鶴岡方言の特徴、(3)個人の一日の言語生活などが課題でした。

第二次の調査は、約20年後の昭和47(1972)年に実施しました。共通語化の要因と過程についての調査を、同じ地域で同じように実施して、20年間における地域社会住民の共通語化の進展をみようとなりました。経年調査の最初の試みです。

第三次調査は、それからまた、約20年後の平成3年(1991)・4年(1992)に実施しました。

三度お世話になった鶴岡調査によって、共通語化の進展状況、「共通語化のモデル」を明らかにできました。また、「方言コンプレックスの問題」や「地方共通語」の実態が明らかになりました。

20年間隔の共通語化の進展(鶴岡市調査)



共通語化とは？

私は第三次調査に参加して、共通語化の大きな進展を実感しました。調査でお目にかかっ

た鶴岡の方々には、私たち「よそ者」と話すとき、伝統的な方言をなかなか聞かせてくださらないのです。よそ者には共通語で、地元同士ならば方言で、と話す相手によって使い分けられるのです。方言と共通語といった二つの言語変種を使えることをバイダイアレクトアル（二言語変種併用・Bidialectal）と言います。日本語しか使えなかった人が、もう一つ外国語を習得することによって、二つの言語が使えるようになることをバイリンガル（Bilingual）と言います。個人の共通語化というのは、それと似た足し算なのです。つまり、方言だけ話していた人が、もう一つ共通語も習得して、二つの言語変種が使えるようになることです。

20年間隔の共通語化の進展

鶴岡市での三度の調査で分かった、世代別の共通語使用率をグラフにしてみました。第一次調査では、30代や20代の広い範囲に行動する世代、例えば首都圏などに働きに行ったり、進学したりする世代の共通語使用率が高くなっています。第二次調査では、年齢が若いほど共通語使用率が高く、10代がもっとも高くなっています。これはテレビの普及によるところが大きいのではないかと考えられます。第三次調査では、調査員の私が実感したとおり、どの世代も100%近い共通語使用率です。地域社会で共通語化が進むというのは、若い方々だけでなく年配の方々もバイダイアレクトアルになるということです。

方言の活力は？

そこで気になるのは、共通語化が進むと、伝統的な方言が衰退してしまうのではないかとことです。たしかに、若い世代では、庄内に特有の伝統的な方言を使わないし、分からなくなっている面がなきにしもあらずです。例えば、庄内の方言敬語には、尊敬表現の「ござる」（いらっしゃる）や、「あがらしてくねへん」（召し上がってください）などがあります。このような丁寧な気持ちのこもった敬語が衰退するのは、惜しいことと思います。幸いなことに、庄内では伝統的な方言を尊重する機運が高く、実際に使う活動や記録に残す活動が盛んです。こういう活動が方言の活力を生み出しているのです。若い世代でも、方言は衰退するだけではないのです。全国各地の若者層が、仲間内で新しい方言を生み出したり、伝統的な方言を復活させたりしています。方言はいまだ活力を保って変化しているのです。

三川中学校のみなさんにお世話になった調査

国語研究所では、日本語の話しことばをめぐるもう一つの重要な言語問題である、戦後の社会変動・意識変革にともなう敬語使用と敬語意識の問題に取り組み、まず、地域社会を対象として、敬語使用や敬語意識の実態を明らかにする社会言語学的研究を行いました。その後、調査の対象を、企業社会、学校社会と広げていきました。

三川町立三川中学校の生徒のみなさんには、平成元年（1989年）にアンケート調査、面接調査でお世話になりました。その調査結果を、この後、尾崎が「若者の敬語」と題して報告します。

多様性を認め合い、方言も共通語も敬語もともに尊重しよう

本来、方言と共通語は、対等の価値を認めるべきものであり、場面や話し相手によって使い分けるものです。現在、特色ある方言を持つ地域の人々から方言コンプレックスが消えつつあり、各地で、方言と共通語がともに栄える理想的な社会が築かれつつあります。国語研究所の先輩、柴田武が「私は、若いとき、特に東北地方の人びとが自分の方言を卑下して、話もろくにできないことに義憤に近いものを感じていた」と言っていた時代は遠くなりました。

日本人全体が、方言も共通語も敬語もともに尊重し、多様性を認め合い、いろいろな人と円滑なコミュニケーションができるような社会を築いていきたいものです。

「方言と共通語—櫛引町の談話資料から—」

井上 文子

(国立国語研究所)

1. 方言と共通語の使い分け (『新「ことば」シリーズ 12 言葉に関する問答集—言葉の使い分け—』)

- ・相手がどんな人か。
(同じ方言を話す／話さない, 目下／同輩／目上, 親しい／親しくない 等)
- ・その場がどのような場か。
(くつろいだ場・私的な場／改まった場・公的な場, 自分の方言の話される地域／話されない地域 等)
- ・どんな内容の話か。
(日常的な話題／抽象的専門的な話題・重要な話題, 狭い地域やグループ内の話題／広い世界に通じる話題 等)
- ・どんな言語活動か。
(話す／書く 等)

★もともと共通語が使われやすい場合

- ・「目上」の人や「親しくない」人と「改まって」「重要な」話をするとき。
- ・「書く」とき。

★もともと方言が使われやすい場合

- ・「親しい」「同輩や目下」の人と「地元で」「くつろいで」「私的な」おしゃべりをするとき。

2. 「各地方言収集緊急調査」

- ・「全国的に急速に変化し, 失われつつある各地の方言を各都道府県において, 緊急に調査し, 記録・保存する。」
「自然な方言会話を良質な録音で採録し, 後世に残す。」
- ・1977(昭和 52)～1985(昭和 60)年度に実施。
- ・47 都道府県それぞれの中の 5 地点程度で録音 (合計約 220 地点)。
- ・1 地点 1 年度あたり 10 時間の録音 (合計約 4000 時間の録音テープ)。
- ・そのうち, 1 地点 1 年度あたり 3 時間分を文字に書き起こして, 共通語訳をつける。
- ・当時 60～80 歳代の, 地元で生まれ育ったお年寄りたちの, 方言での日常会話。

- ★この中から各都道府県 1 地点を選び, 会話の音声, 文字の書き起こし, 共通語訳を,
『国立国語研究所資料集 13 全国方言談話データベース 日本のふるさとことば集成』
(CD, CD-ROM 付, 発行: 国書刊行会) として, 2001 年から刊行中。

★山形県では・

- ・1980(昭和 55)～1982(昭和 57)年度に実施。
- ・新庄市, 寒河江市, 西置賜郡飯豊町, 東置賜郡川西町, 東田川郡朝日村, 東田川郡櫛引町で収録。
- ・話題は, 子供の頃の遊び, 昔の農作業, 嫁入り・婿取りのしきたり, 年中行事, など。

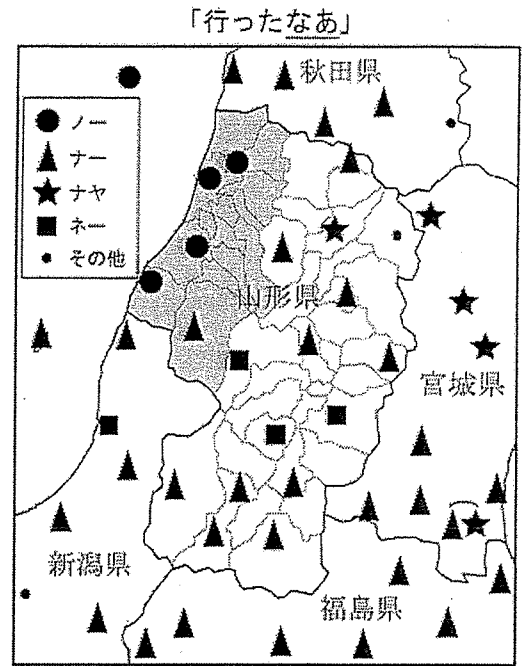
3. 庄内方言の特徴

お年寄りのことばの中の伝統的な方言

★「ノー」, 「ノ」

- ・「ガンズズノ ヒバッカリダヤノー。
(元日の日だけだねえ。)」
- ・「イー ワガジェ ナル ソワイデノ。
(いい若い衆になると言われてね。)」
- ・共通語の「ねえ」, 「ね」にあたる。
(終助詞・間投助詞)
- ・文の終わりや、文節の切れ目に使う。
- ・方言の地域差 山形県内。
「ノー」 ⇔ 「ナー」など

『方言文法全国地図 第4集』第189図「行ったなあ」
「昔、友達と祭りに行ったことをなつかしく思い出しながら、その友達に言います。「昔、二人で祭りに……」その次にどのように言いますか。」

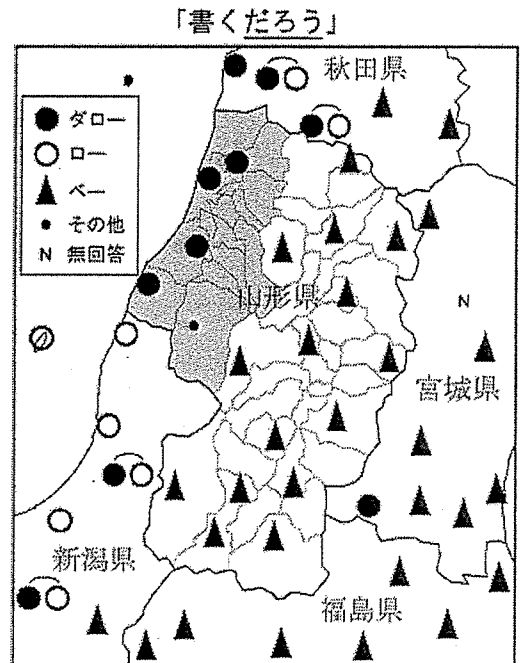


『方言文法全国地図 第4集』第189図により略図作成

★「デロ」, 「デロー」, 「ダロ」, 「ダロー」

- ・「ズースズハズモ クタモンデロノ。
(17, 8も食べたもんだろうね。)」
- ・「ンダロノ。 ンダノ。
(そうだろうねえ。 そうだねえ。)」
- ・共通語の「だろう」にあたる。(推量の助動詞)
- ・方言の地域差 山形県内, 東北地方。
「ダロー」系 ⇔ 「ペー」系

『方言文法全国地図 第3集』
第112図「書くだらう(推量形)」
「あいつは、たぶん手紙を書くだらう」と言うときの「書くだらう」のところは、地方によって、カクダロー・カクペーなど、いろいろの言い方をします。この土地ではどのように言いますか。」



『方言文法全国地図 第3集』第112図により略図作成

★「ハゲ」, 「サゲ」, 「スケ」

- ・「ムガシノ オーバーサン イルモンダハゲ (昔のおばあさん [が] いるものだから)」
- ・「ンダサゲ イチバン カワッタナガ (そうだからいちばん変わったのが)」
- ・共通語の「から」にあたる。(原因・理由を表す接続助詞)
- ・関西方言の「サカイ」が伝わって、変化したもの。
- ・方言の伝わり方。土地を伝って。船に乗って。
- ・方言の地域差 山形県内, 東北地方。全国。

「サカイ」系 ⇔ 「カラ」系。

『方言文法全国地図 第1集』

第38図「(雨が) 降っているから」

「雨が降っているから行くのはやめ

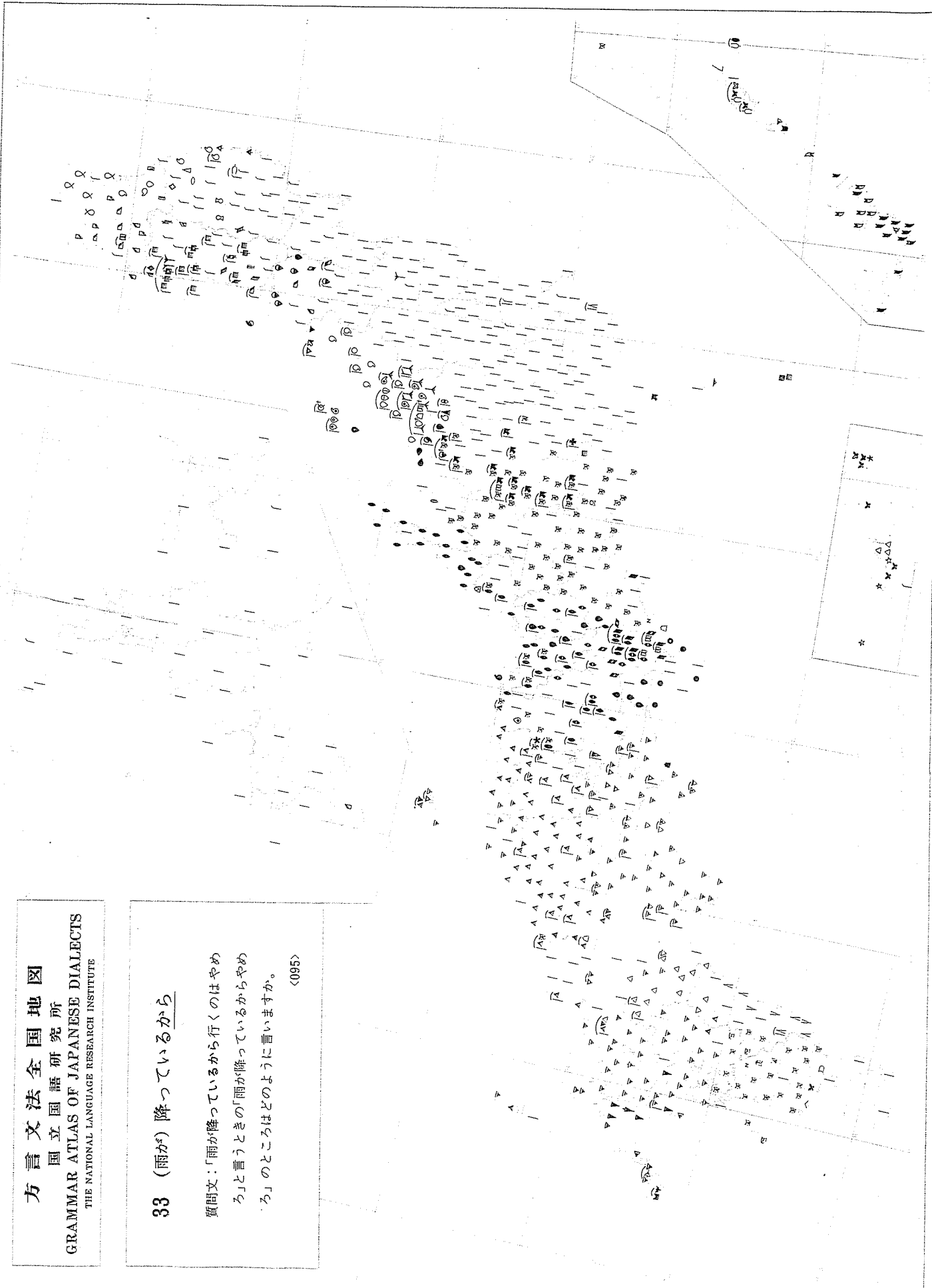
ろ」と言うときの「雨が降っているからやめろ」のところはどのように言いますか。」

赤線	「サカイ」系	東北北部～日本海側～北陸～近畿
三角	「カラ」系	東北地方南部～関東
爪形	「ケン」系	中国, 四国, 九州北部
	「デ」系	中部, 鹿児島

方言文法全国地図
 国立国語研究所
 GRAMMAR ATLAS OF JAPANESE DIALECTS
 THE NATIONAL LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE

33 (雨が) 降っているから















質問文：「雨が降っているから行くのはやめろ」と言うときの「雨が降っているからやめろ」のところはどのような言い方ですか。
 <095>



★クイズ

- ・庄内の方言はどれでしょう？
- ・どうしてわかりましたか？

★会話 1

	ソレカラ アノー バン ナルトネ アノー ヨサリ チーマスワネ。 それから、あの、 晩 [に] になるとね、 あの、 「ヨサリ」 と言いますよね。						
	ヨサリワ ユー。 「ヨサリ」は 言う。		ヨサリワ ユーナー。 「ヨサリ」は 言うなあ。				
	コレワー ヨー ユーナ。 これは よく 言うね。		コレワネー アノー ウチノ これはねえ、 あの、 うちの				
	イマ ワタシラデモ ツコーテマスワネ。 今 私らでも 使っていますよね。						
	ムスメガネ アノー {笑} ジョガッコエ イットツテ ヨサリ 娘がね、 あの、 {笑} 女学校へ 行っていて、 「ヨサリ」 ユーベ ヨサリニ コンナヤツタ ユータ アンタ 「ゆうべ ヨサリに こんな [ふう] だった」 [と] 言ったら 「あんた オーバーハンミタイナコト ユーネンナー {笑} ユーテ ワラワレタ おばあさんみたいなこと [を] 言うんだなあ」 {笑} [と] 言って 笑われた ユーテネ。 {笑} ヨサリ チューコトバモネ アノー アンマリ [と] 言ってね。 {笑} 「ヨサリ」 ということばもね、 あの、 あまり イマー ツカイマセンネンナ。 ヨサリ。 今 使わないんですね。 「ヨサリ」。						
	ソーデンナ。 そうですね。		ナ。 ね。		ツカイマセンネンナ。 使わないんですね。		ツカワシマヘンナ。 使いはしませんね。
	ンー ソヤ。 ナー ムカシワ ヨー イーマシタナ。 うん、 そうだ。 ねえ、 昔は よく 言いましたね。 ヨサリ チュナナ。 「ヨサリ」 というような [こと] をね。						
	ヨサリ アメ フツタカラ トカネー。 「ヨサリ 雨 [が] 降ったから」 とかねえ。						
	エー。 ヨサリニ アメ フツタ トカネ。 ええ。 「ヨサリに 雨 [が] 降った」 とかね。						

★会話3



ンダ ニダリヨッタリダノ。
 そう 似たりよったりですね。



ドゴネダタテ ソノフーシューデノ。
 どこの家だって その風習でね。



オナゴワ イズマデモ ネラインナハ ガンズズノ ヒバッカリダヤノー。
 女は いつまでも 寝られるのは 元日の 日だけだねえ。

マズ ソゲダモンダケノ。 ガンズズワ マズ オナゴショワ ネデレ ド
 まあ そんなとこだね。 元日は まず 女衆は 寝ている と。

トスオドゴカ° ナニモカニモ ミナ ステ。 マズ ソノ ソウニモズ。
 年男が なにもかも みんな して。 まず その 雑煮餅。



イマワ ホレ ナンダカダテ ヤッツイデダドモノ。
 今は ほら なんだかんだとって やっているわけだけれどね。

ニグモ ハラネモダケス イモノクギサ ナンダ
 [あのころは] 肉も 入らなかったものだし、 いもの茎に なんだっけ

ヤギイワスデモ ヤギボスデモ ヘレバ {笑} ジョートーノホーデ
 焼きいわしでも 焼きぼしでも はいれば {笑} 上等のほうで、

アブラゲデモ イダリ ソーユーヨーダ ヤリガダステ。
 油あげでも 入れたり そういうような やりかたして。



ソノ イッショーガラ ナンボ デガノ。 ジューニサン デルガ ジュウゴデッガノ。
 その 1升から いくつ できるかな。 12、3 できるか 15できるかな。

モズ トー クッタドガ ナナツ クッタドガ ヨッツ クッタドガ
 餅 [を] 十 食べたとか 七つ 食べたとか 四つ 食べたとか、

ジマンゴケ° クッテダモンダノ。 {笑}
 [たくさん 食べるのを] 自慢にして 食べていたものだね。 {笑}



ンダ トスノ カズ クド イー ワガジェ ナル ソワイデノ。
 そうそう、 歳の 数 食べると、 いい 若い衆に なる と言われてね。

ウン イッペ ケー ストダバ ヤッパリ ジューズズハズモ クタモンデロノ。
 うん、 多く 食べる 人なら やはり 17、8も 食べたもんだらうね。



ジューズズハズワ ナンダガモ スネドモ。
 17、8は なんだかも しれないけど。



ワレワレダテ ナナズヤ ヤッツダバ マズ ンダノ チャワンサ フタツツナノ
 我々だって 七つや 八つなら まず そうだな、 茶碗に 二つなんか

デッテ ヘレバ ツユ カゲライネホドノ モズダモンダケドモ
 たくさん 入れれば 汁 かけられないほどの [大きな] 餅だったもんだけれど、

ソノモズ ヤッパリ ジュウゴロッパ ジューニサンワ クッタモンダノ。
 その餅 やはり 15、6杯 12、3は 食べたものだね。

参考資料

山形県東田川郡櫛引町

オレ キタドギダバノ オーユギナ トシデ
私 [が] [嫁に] 来たときであればね 大雪の 年で、

コゴノワー リョーガワ ニグルマ アルガイルダゲデ ソノ
ここのは 両側 荷車 歩かれる丈で、 その

ドンゾーノ ドゴサ クルマ ミンナ コー タデダモンダ。
土蔵の ところに 荷車 [を] みんな こう 立てたものだった。

ソイタケ オーユギデ ドーロモ
それだけ 大雪で 道路も

ガチャガチャド ユギ アルモンダハゲ
ガチャガチャと 雪 [が] あるものだから、

ガチャカチャカチェート イマミデエ ゴムグツデモ ネエンダロー。
ガチャカチャカチェと 今のように ゴム靴でも ないだろう。

アノー ワラグズ ハイデ ハイダリ ゲダ ハイダリシテ
あの 藁靴 履いて 履いたり 下駄 履いたりして

カチャカチャカチャ ミンナ キモノサ シッパネ カゲライダデヤ。
カチャカチャカチャ みんな 着物に しっぱね かけられたものだ。

ヨメワ シズガエ シズガエ アリグハゲノー
嫁は 静かに 静かに 歩くからねえ。

オラ チツエドキワ デツテ。
うん 小さいときは たいへんに。

オラ セッショウズギデノー。 デツテ。
うん 殺生好きでねえ。 たいへんに。

ザッコシメ、 ザッコシメ。 ドジョウシメモ ヤッタモンダ。
雑魚捕り 雑魚捕り。 どじょう捕りも したもんだ。

ソレゴソ ムガシワ コーユー セギッコ アンナダモンダサゲノ。
それこそ 昔は こういう 堰が あるものだからね。

ガタガタ コシャテヨ。
「ガタガタ」[を] 作ってね。

ガタガタ ッテ コッチャ コンナ アミ アデガッテヨー。
「ガタガタ」といって こっちに こんな 網 [を] あててね。

ハジメワ アノー フゴデ シエメダロツケノー。
はじめは あの ふごで 捕っただろうと思うがねえ。

国立国語研究所第9回「ことばフォーラム」
2002年3月24日
山形県三川町(なの花ホール)

若者の敬語 —三川中学校の調査から—

国立国語研究所主任研究員
尾崎 喜光

1

目次

- 1. 「寒いっすね」—最近若者が多用する敬語—
- 2. 三川中学校での調査—東京の中学生と比較しつつ—
(1) アンケート調査から
 - ① 自称詞の使い分け—自分のことをどういうか—
 - ② 文末の「ノー」(方言の終助詞)の使い分け
- (2) 面接調査から
 - ① 目上(先生・上級生)への敬語使用
 - ② 東京都民調査と比較して

2

1. 「寒いっすね」 —最近若者が多用する敬語—

■ 最近行なった大学生調査から (先輩に対する敬語)

	関東男性 (172人)	関東女性 (521人)	関西男性 (178人)	関西女性 (569人)
「行きましたよ」	95.9%	97.8	97.1	98.7
「行っただよ」	58.7	18.0	61.8	18.8
「行っただ」	18.0	28.6	17.4	26.8
「行っただで」	—	—	25.8	23.7
「行きましたで」	—	—	10.1	2.9

(注) 5~15歳の最長居住地が地元(「関東」「関西」)の回答者を抜き出して分析。
ハイキングに行ったかどうかを先輩から聞かれて答える場合を特定させ、それぞ
ねの言い方について、自分で言うかどうかを回答させた。数値は「言う」の回答。
新聞記者の②も参照。

3

■ 「寒いっすね」の面白さ

- 「形容詞+です」(寒いです)
 - 「形容動詞+です」(静かです)
 - 「名詞+です」(三川町です)
 - 「動詞+ます」(行きます)
- 「～っす」
- ×「行きっす」
○「行くっす」

* 「です」「ます」2系列の丁寧語が、「(っ)す」1系列になる。
* 動詞の場合、1段ではなくウ段(言い切った形)に付く。
* この形はもととの山形県の言い方として存在する。

4

2. 三川中学校での調査

— 東京の中学生と比較しつづ —

■ アンケート調査(計6021人) * 1989~1990年度実施

東京都の中学生 (2456人) 東京都の高校生 (2222人)

大阪府の高校生 (1004人) 山形県の中学生 (339人)

三川
中学校

■ 面接調査(計342人)

* 1989~1991年度実施

東京都の中学生 (72人) 東京都の高校生 (120人)

大阪府の高校生 (108人) 山形県の中学生 (42人)

三川
中学校

5

(1) アンケート調査から — その1 —

① 自称詞の使い分け * 自称詞=自分を指す言葉

ア. 同性の友人に言う場合

イ. 校長先生に言う場合

ウ. 方言形「オイ」の相手による使い分け

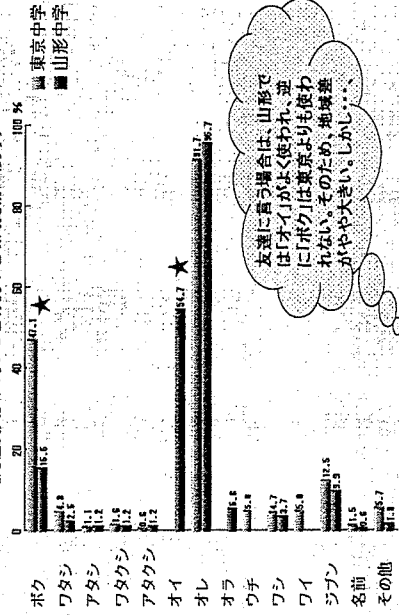
エ. 「ボク」「ワタシ」の相手による使い分け

オ. 「オレ」の相手による使い分け・男女差

6

ア. 同性の友人に言う場合 (男子)

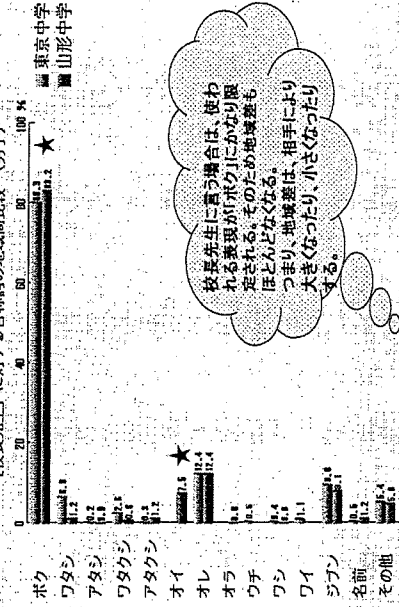
[同性友人] に対する自称詞の地域間比較 (男子)



7

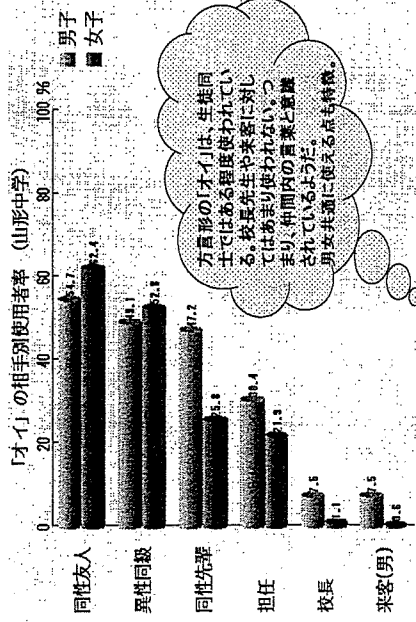
イ. 校長先生に言う場合 (男子)

[校長先生] に対する自称詞の地域間比較 (男子)



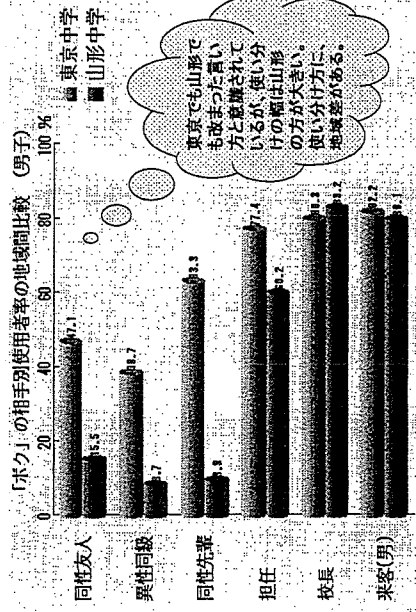
8

ウ.「オイ」の相手による使い分け



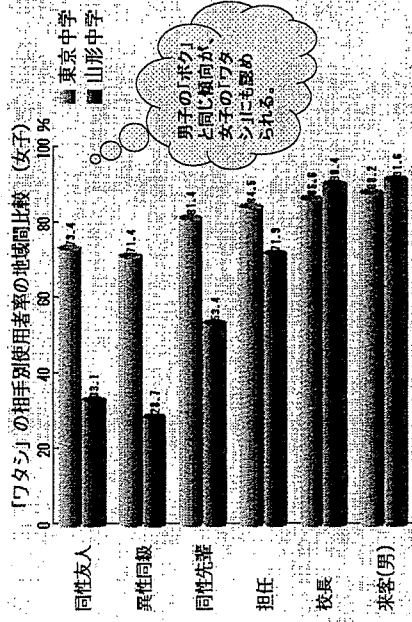
9

エ-1.「ボク」の相手による使い分け(男子)



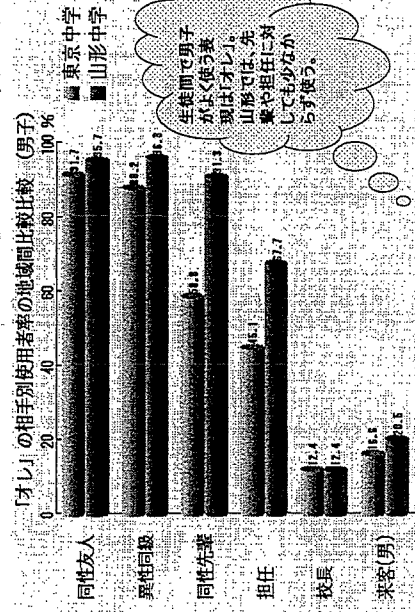
10

エ-2.「ワタシ」の相手による使い分け(女子)



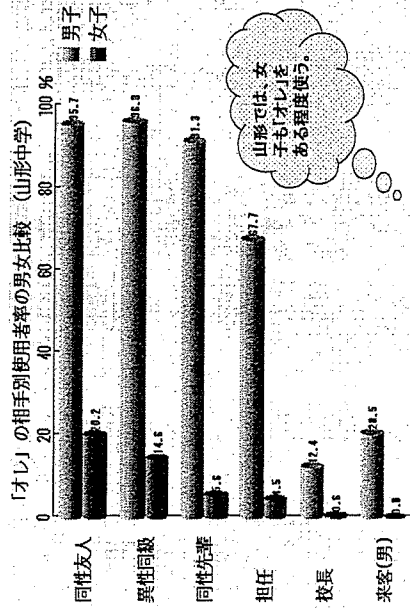
11

オ-1.「オレ」の相手による使い分け(男子)



12

オ2. 「オレ」の相手による使い分け(男女比較)



13

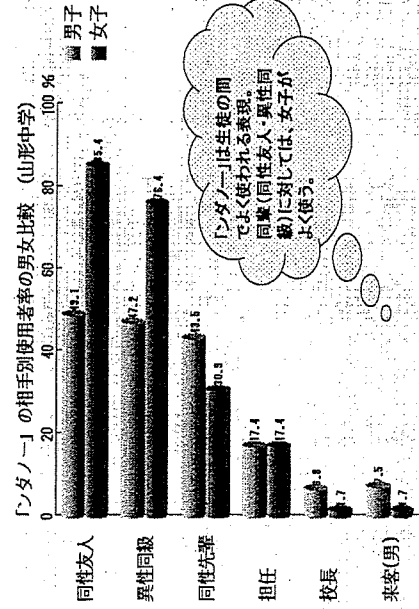
(1) アンケート調査から - その2 -

②文末の「ノー」(方言の終助詞)の使い分け

- ア. 肯定表現「نداノー」の相手による使い分け
- イ. 別れの挨拶「نداバノー」「マズノー」の相手による使い分け
(参考) 別れの挨拶「サヨウナラ」の相手による使い分け

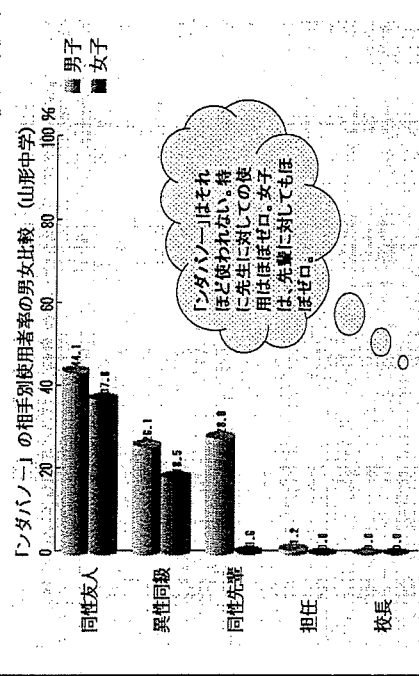
14

ア. 肯定表現「نداノー」の相手による使い分け



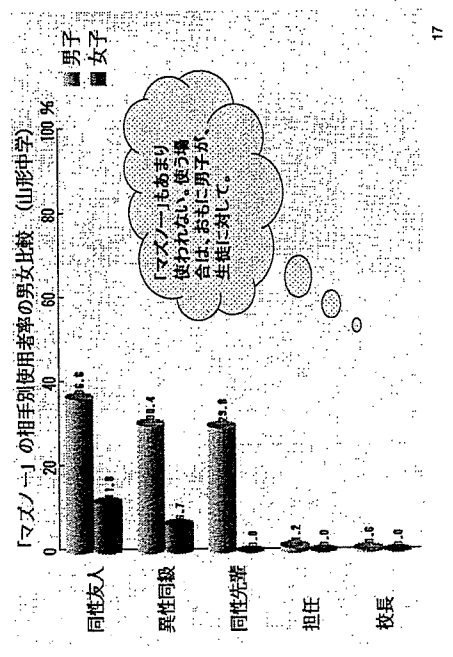
15

イ-1. 別れの挨拶「نداバノー」の相手による使い分け

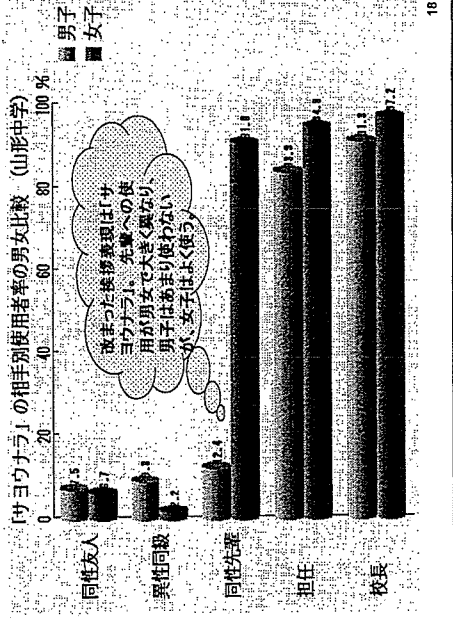


16

イ-2. 別れの挨拶「マズノー」の相手による使い分け



(参考) 別れの挨拶「サヨウナラ」の相手による使い分け



(2) 面接調査から

① 目上(先生・上級生)への敬語使用

「[自分]は行くが、

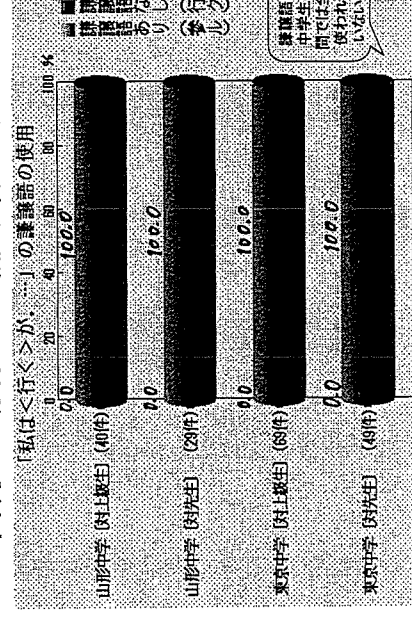
[相手]は行くか?」

- ([自分]は)
 - 参る(謙謙語あり) } ます・です(丁寧語あり)
 - 行く(謙謙語なし) } -----(丁寧語なし)
- ([相手]は)
 - 行かれる・いらっしやる(尊敬語あり) } ます・です(丁寧語あり)
 - 行く(尊敬語なし) } -----(丁寧語なし)

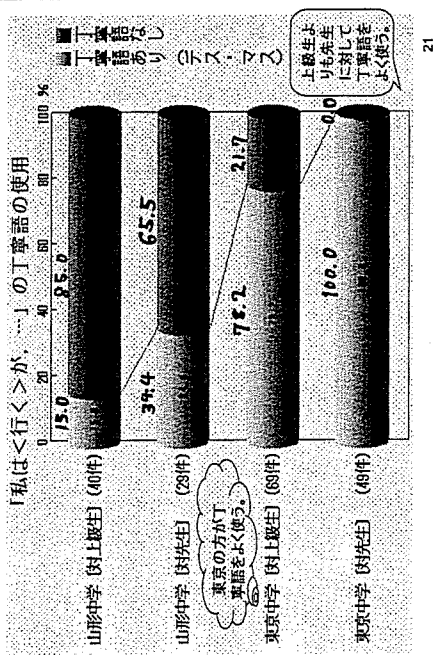
ポイント1: 自分の「行く」という動作を謙語にするかどうか。目上の人の「行く」という動作を尊敬語にするかどうか。

ポイント2: 丁寧語「です・ます」を使って語を言うかどうか。文中と文末で違いがあるかどうか。

自分の動作への謙譲語の使用

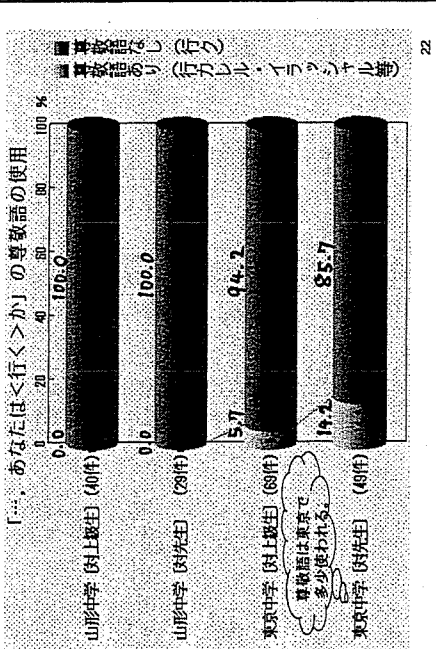


文中での丁寧語の使用



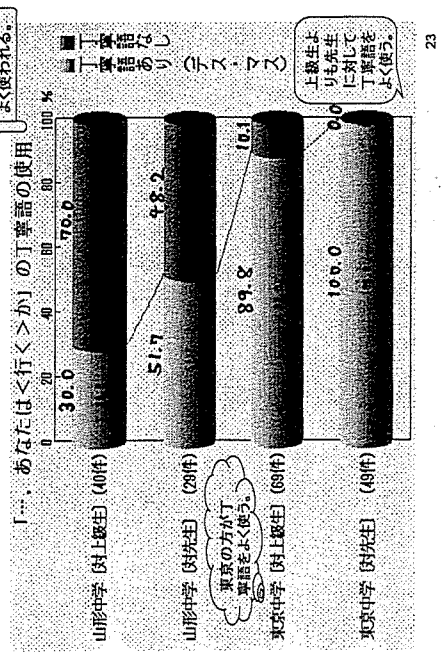
21

目上の相手の動作への尊敬語の使用



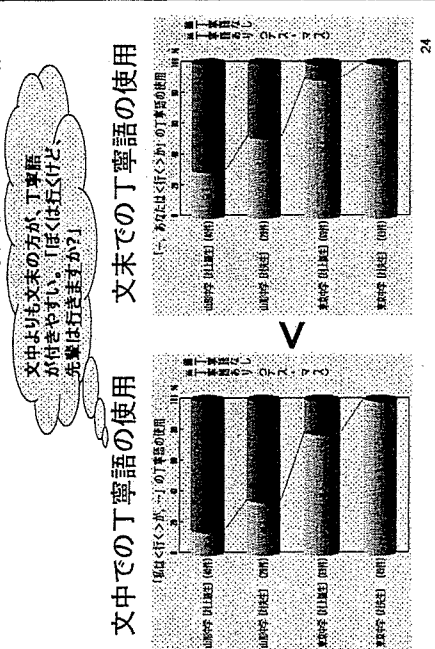
22

文末での丁寧語の使用



23

「文中」と「文末」の丁寧語使用の比較

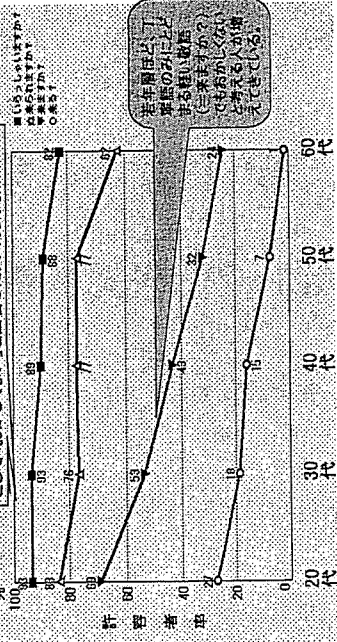


24

② 東京都民調査と比較して

1997年秋実施 有効回答数=1013人(有効回収率=33.8%)

先生に対し(来るか?)という内容を尋ねる言い方として「おかしな」と回答した人の比率。



25

まとめ

- 「寒いっすね」のような表現は、若者(特に男性)の間で全国的に使われているらしい。
- 自称詞のアンケート調査結果によると、相手が友人の場合は地域差がやや大きい、相手が校長先生の場合は地域差が小さい。地域差も相手により“伸縮”する。
- 方言の「オイ」は主として生徒同士で使用。
- 「ボク」「ワタシ」は主として先生に対して、「オレ」は主として生徒に対して使用。
- 山形では女子も「オレ」をある程度使用。

26

まとめ (続き)

- 方言の終助詞「ノー」を含む「ンダノー」「ンダバノー」「マズノー」は、主として生徒同士で使用。先生への別れの挨拶は「サヨウナラ」。
- 面接調査の結果によると、謙譲語はほとんど使われない。尊敬語の使用も少ない。
- これに対し、丁寧語は比較的よく使われる。上級生よりも先生に対してよく使われる。文中よりも文末でよく使われる。山形よりも東京でよく使われる。
- 若者の間では、目上に対する場合、丁寧語だけでも十分と意識される傾向が出てきているようだ。

27

付記

(きょうのお話の関連資料)

* いずれも国立国語研究所編集

- 『国立国語研究所報告118 学校の中の敬語 1 -アンケート調査編-』 (2002年4月刊行,三省堂,10000円+税)。
- 『日本語社会における言語行動の多様性』 (1999年3月刊行,非売品,執筆=尾崎喜光)
- 『新にとばしシリーズ12 言葉に関する問答集 -言葉の使い分け-』 (2000年3月刊行,財務省印刷局,360円+税)

28

方言による授業作りの可能性

茂呂雄二(筑波大学心理学系)

佐藤武夫(三川方言研究家、三川町議会議員)

斎藤元弥(三川町立横山小学校教諭)

佐藤栄市(横山小学校父兄、三川町議会議員)

甲斐睦朗(国立国語研究所長)

セッションのねらい

方言はそれぞれの地域文化を支える大切なメディアです。方言を小中学校の授業実践のなかで活かすことは、地域文化の継承と地域文化の再創造に子どもたちを招き入れるうえで非常に重要だと考えます。

授業作りを考えるうえで、方言は二つの役割を担うように思います。ひとつは、授業そのものの成立を支え、授業と学習の進行を促していくという役割です。いま一つは、方言そのものを授業の主題にすることで、児童・生徒が自分自身の生活や地域文化について捉え直す機会を提供する、という役割です。

このセッションでは、方言のもつ役割について、授業作りの面から考えてみます。つまり、方言をテーマにすると、授業実践がどのように豊かなものになるのかについて、事例や実践例を通して考えてみたいと思います。

報告

授業における方言の役割(茂呂雄二)

三川町の小学校・保育園の授業・実践のビデオデータから、授業のなかで子どもたちと教師が方言を使い合うことの役割を考えます。1988年から、三川町、鶴岡市、余目町の保育園、幼稚園、小学校で授業の観察をさせていただいています。数多くの授業を見せていただく中で、方言が実は非常に大切な役割を果たしていることに気付いてきました。

第一は、授業を円滑に進めるという働きです。授業は、一本調子でずっと続くものではありません。始めと終わり、子どもも教師も非常に集中する場面とゆったりとリラックスする場面、発表をする場面と自分自身の考え方を練る場面など、性格の異なる場面のあいだで何回も場面転換しながら進行するものです。方言は場面転換を子どもたちと教師に知らせる手掛かりとなり、授業中のやり取りを円滑に進めるうえで非常に重要な役割を果たしているのです。

第二の役割は知的な働きです。授業のビデオ資料の中には、子どもたちが独り言や近くの子どもたちに話し掛ける様子がよく映っています。これらの全てを私語と一くりにするわけにはいきません。子どもたちは、教師の発問に促されて自分の経験をまとめようとしたり、級友の発言に刺激を受けて自分なりの思いをまとめようとするときに、いわゆる“つぶやき”を発します。このつぶやきはほとんど

全てが方言で発せられます。子どもたちは、学習の内容を自分のことばでかみ砕いたり、いまだ明確な形にならない自分の思いを述べたりするときに、方言は非常に有効な道具となるようです。

三川中学校における方言コースの実践(佐藤武夫)

三川町立三川中学校で『地元の人に学ぶ』取り組みのうちの『方言コース』を担当しています。この取り組みは総合的な学習をねらいにしたもので、郷土史、手話、短歌などの多数のコースからなり、生徒が自分でいずれかのコースを選択します。これまで2年間の経験から、実践や実践での発見についてお話しします。

4月から12月までの毎水曜日の実践ですが、大きく3つの内容に分けられます。第一は方言に興味を持ってもらうための《課題》です。〈方言集め〉課題、〈方言聴き取り、翻訳〉課題、〈アクセント、音声〉課題を行います。たとえば〈方言集め〉課題は、4月のコース開講時によるもので、10個の方言を集めて互いに発表します。

第二は《方言寸劇》です。テーマ探しからはじめて台本を方言で作り上げ、最終目標は学校祭での発表になります。

第三は、《テスト》です。これはコースのアンケートを兼ねたもので、

以上の授業内容以外に、課題や活動のあいまいに、方言についてのたくさんの《脱線》話をします。その中で私が強調するのは、ことばに良い悪いは無いということです。父兄の中には方言を話すと言葉が悪くなるという方もおられて、その影響か子どもたちの中にも方言が恥ずかしいと感じているらしい子どもも少なくありません。生活に根差し、思いを心から伝えることのできるのは、方言にあります。方言は、非常に短い言葉で端的に心を映すことのできることばであります。これは共通語では難しいのです。

このコースを通して、子どもたちの方言に対する態度も変化するようです。庄内弁の楽しさがわかった、方言をもっとどうどうと使ってみたい、といった感想がアンケートに現れることから、子どもたちの方言の見方や捉え方も大きく変化するようです。

「ふるさと方言について調べ、再構成することで表現方法を工夫し発信しよう」

話しことばの重要性(斎藤元弥)

三川町立横山小学校での実践について話します。この実践では、〈つかむ〉〈交流する〉〈広げる〉をねらいにした単元を用意し、子どもたちに言語への関心を育み、表現・理解能力を養い、方言と共通語の違いなど言語事項に関する学習を目標にしました。

〈つかむ〉では、各地の方言音声資料の聴取、自分の経験、インターネットでの検索などを通して、故郷の方言に対する興味、関心を高めました。

〈交流する〉では、教科書の教材を読み、パネルディスカッションなどを通して議論し、共通語の必要性和方言の良さについて話をしました。

〈広げる〉では、クイズ作り、テレビ番組作り、プレゼンテーションなど様々な活動を通して、方言について調べたことを、クラス外に発信しました。

実践を通して、気付いたことのひとつに、生活を支える話しことばとしての方言に気付くことの重要性和、その難しさがあります。子どもたちは、方言というと、めずらしい方言語彙に真っ先に関心が向く傾向があります。これは方言クイズを作る場合などはよいのですが、方言の役割をじっくりととらえなおす場合には、むしろ普段使っている音声ことば、とくに庄内方言らしいイントネーションの重要さに気付いて欲しいと思います。

また、子どもたちのことばに対する関心を高めるには、身近な教材を使用するとよいように思います。三川町編集『東北の方言詩』に出てくる「の一の一ばちゃん」は、児童にとって身近な作者が、祖母の長生きを願うという共感できる内容であり、子どもたちの学習の動機づけになるものでした。

授業実践を父兄として支えて(佐藤栄市)

斎藤実践での、〈広げる〉の場面に参加しました。子どもたちが方言について調べたことを、プレゼンテーションソフトを使って、発表するのを聞くという役割で授業に参加しました。そこでのやり取りでは、子どもたちから方言は将来無くなるのかどうかについて聞かれました。授業を通して、子どもたち自身も方言の意味を認識し、自分たちが受け継ぐことの必要性を分かりはじめたように感じました。

横山小学校での実践は、いうまでもなく学校の取り組みと斎藤先生の指導によって成立したわけですが、三川町という環境も重要だったように思います。方言大会や方言詩作りなどの取り組みに普段から馴染んでいることで、これらの大人の活動を授業における活動のモデルにしたり、調べ学習の助けにできたという面もあるのではないのでしょうか。

現在、総合的学習について、いろいろ議論されていますが、意味のある学習の実現のためには学校と地域の連携が大切であることを、あらためて認識しました。

コメント

以上の報告を受けて、甲斐睦朗氏には、長年、国語教育を専門とされた立場から、コメントしていただきます。授業や話しことば教育において、従来、方言がどのように位置づけられてきたのかについてお話しいただきます。また、これからの話し言葉教育で、方言をどのように取り上げることができるのか等に関する、今後の教育・授業作りでの方言の役割などについても話をしていただきたいと思います。

(注) この資料の記述については、茂呂がそれぞれの参加者から提供された資料をまとめたものであり、紙面の制約から十分な説明ができていない恐れがある。誤解を招くような記述がある場合には、責任は参加の方々ではなく、すべて茂呂にある。